

杜甫「春望」再読

後藤秋正

はじめに―「春望」という詩題―

梁・蕭子范（四八六～五四九）「春望古意」

光景斜漢宮、橫梁照采虹 光景 漢宮に斜めなり、橫梁 采虹照る

春情寄柳色、鳥語出梅中 春情 柳色に寄せ、鳥語 梅中より出づ

氛氳閨里思、逶迤水上風 氛氳かんうんたり閨里の思い、逶迤ゑいゐたり水上の風

落花徒入戸、何解妾床空 落花 徒に戸に入る、何ぞ妾床の空しきを解かん

北周・宗懐（？～六二五）「春望」

日暮春台望、徙倚愛余光 日暮 春台より望み、徙倚して余光を愛す

都尉新移棗、司空始植楊 都尉は新たに棗を移し、司空は始めて楊を植う

一枝猶桂馥、十歩有蘭香 一枝 猶お桂馥あり、十歩 蘭香有り

望望無萱草、忘憂竟不忘 望望として萱草無し、憂えを忘れんとして竟に忘れず

北周・庾信（五一三～五八一）「春望」

春望上春台、春窗四面開 春望せんとして春台上れば、春窗 四面に開く

落花何仮払、風吹会并来 落花 何ぞ払うを仮かりん、風吹けば会かはず并かび来らん

【参考】

安藤信広「『春望』―杜甫の孤独な春―」『講座／現代の文学教育〔第六卷〕』中学・高校〔古典編〕（新光閣書店、一九八四）

春は靈魂がひどく浮游しがちな季節なのだ。生者のそれも、死者のそれも。……三月のある日杜甫は高所に登り、「春望」詩を作っただろう。……浮動する自己の魂を招きよせねばならず、戦乱に横死した多くの死者の霊をも慰めねばならぬならぬ三月。……家族から切り離された自己が大きく浮かび上がって来るのはそのためであろう。「家書は万金に抵る」のだ。自己の魂を招きよせられないなら、自分はむざむざと老いて行く。

喬継堂・朱瑞平主編『中国歳時節令辞典』（中国社会科学出版社、一九九八）

……春秋時鄭国每逢上巳、人們溱洧兩醉、招魂統魄、秉執蘭草、祓除不祥。至漢上巳確定為節。……魏晉以後上巳節期改為三月三日。

一 杜甫「春望」

杜甫「春望」

国破山河在 城春草木深 感時花濺淚 恨別鳥驚心

烽火連三月 家書抵萬金 白頭搔更短 渾欲不勝簪

◎制作時期

①郭知達『九家集注杜詩』卷一九（淳熙八年（一一八一））

趙（次公）云、考此詩作於天寶十五載（七五五）七月、至德と改元之正月。蓋祿山反於十四載之十一月、至是則烽火連三月（趙云う、考此の詩を考うるに天寶十五載の正月に作る。蓋し祿山は十四載の十一月に反す、是に至れば則ち烽火 三月に連なると）。

② 仇兆鰲『杜詩詳注』卷四（康熙四二年（一七〇三）初刻）

鶴注、此当是至德二載三月、陷賊營時所作。三月者、指季春三月。趙氏謂、祿山反於天宝十四載之十一月、至次年正月為三月、失於不考耳（鶴注、此れ当に是れ至德二載（七五七）三月、賊營に陥りし時作る所。三月は、季春三月を指す。趙氏謂う、祿山は天宝十四載の十一月に反し、次年正月に至るを三月と為すと、不考に失するのみ）。

③ 宋・黃希、黃鶴補注『黃氏補注杜詩』卷一九（嘉定九年（一一二六）成書）

（黃）鶴曰、天宝十五載正月、明皇未幸蜀、方自命嗣吳王祇・李隨・李光弼等討安祿山、安得謂之國破。是時公携家在奉先、五月方入鄜、道路未絶、書非難達。趙注以十四載之十一月、至次年正月為三月。失於不考。当是至德二載三月陷賊營時作。三月者、直指三月而云（鶴曰く、天宝十五載正月、明皇未だ蜀に幸せず、方に自ら嗣吳王祇・李隨・李光弼等に命じて安祿山を討たしめんとす、安んぞ之を國破ると謂うを得んや。是の時公は家を携えて奉先に在り、五月方めて鄜に入り、道路未だ絶えず、書は達し難きに非ず。趙注、十四載の十一月より、次年正月に至るを以て三月と為すは、不考に失するのみ）。

④ 顧宸『辟疆園杜詩註解』五言律卷二（康熙二年（一六六三）序刊）

此祿山陷京師、公在賊中三月作也。……三月直指至德二載三月而言（此れ祿山京を陥れ、公賊中に在りし三月の作なり。……三月は直だ至德二載三月を指して言う）。

⑤ 吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（筑摩書房、一九七九）

詩中の5（烽火連三月）の「三月」を、陰曆三月を意味するとすれば、至德二載晚春の作、その朔は、太陽曆の三月二十五日。

二——「国」と「城」

● 森槐南『杜詩講義上巻』（文会堂書店、一九二二）

国破れて残る所のは即ち山河のみである併し春は少しも昔に変わらずして此長安城も春の季節が来れば春らしくなつて参ります事であつて……。

● 鈴木虎雄『杜少陵詩集上』（国民文庫刊行会、一九二八）

〔詩意〕国都は賊に破壊されたが山や河は依然として存在してゐる。この都の城はまさに春が来て草や木がしげつて深くたちこめてゐる。

〔字解〕国∥国都をいふ。城∥長安の城。

● 細貝泉吉『杜詩鑑賞』（帝國教育会出版部、一九二九）

〔意識〕国都が破れて残るところのものは、只だ山河のみなるが、春は依然昔の春で、季節が来れば春らしくなり、自然に城中の艸木も生い茂つて深くたちこめてゐる。

● 目加田誠『杜甫』（集英社漢詩大系9、一九六五）

〔口語訳〕国都は破壊されつくしたが、山河は依然としてそのままであり、長安城にはまた春がめぐつて来て草や木が深く茂っている。

● 小野忍・小山正孝・佐藤保『杜甫詩選（一）四季と山河』（講談社学術文庫、一九七九）

〔口語訳〕国は破れたのに山河自然はそのままだ／城には春が訪れて草木がこんもりと茂っている

〔語釈〕国∥国都、つまり長安のこと。国家の意味ではない。城∥城壁に囲まれた都市全体を指すことば。長安城。

鈴木修次『漢詩』（学燈文庫、一九七八）

〔通釈〕都の長安は破壊され尽くしたが、山河のみは依然としてもとの姿をとどめ、まちなかはあたかも春、草や木が青々と茂っている。

〔語釈〕国Ⅱ国都の長安を指す。一説に、国家の意にとつてもよいとするが、当時「国」といえば、国都の行政機構を主として指していた。城Ⅱまち。城内のまちを「城」という。日本の「しろ」とは違う。

吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（筑摩書房、一九七九）

〔口語訳〕みくに。ただれはて。あるは山川／都。春なるに。草木はびこる

〔語釈〕〔国破山河在〕国家の組織の破滅を〔国破る〕ということ、……。

横山伊勢雄『唐詩の鑑賞―珠玉の百首選―』（ぎょうせい、一九七八）

〔口語訳〕国は崩壊したが、山河の自然は変わらず存在している。長安の城にはまた春が訪れ、草や木が深く生い茂った。

〔説明〕「国破」れるとは、国家の機構と統一が崩壊してしまったことをいう。具体的には、国都のある町を国と意識する中国の場合、都長安が叛乱軍の手に奪われたことをさす。国都の崩壊はそのまま国家の崩壊と意識されていた。

松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、一九八七。「春望」の担当は宇野直人）

国Ⅱ「国家」の意とする説と、「国都（長安）」の意とする説とがあるが、ここでは前者に従う。

A説（国家）森槐南『杜詩講義』中巻など六件を挙げる。

B説（国都）星川清孝『歴代中国詩精講』など一一件を挙げる。

韓世武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七）

〔訳文〕国都已然淪陥而昔日的山河依旧在眼、長安城春天來臨却到处是草木荒深。

下定雅弘・松原朗『杜甫全詩訳注』（講談社学術文庫、二〇一六。「春望」の担当は大田亨）

〔現代語訳〕国家はことごとく破壊されたが、山や河はもとのまま、長安城にも春が訪れて草木が生い茂っている。

〔語釈〕国破Ⅱ安禄山の乱によって国家が破壊されたことをいう。一説に「国」を長安と解する（鈴木注）。ただし後藤秋正『春望』の『国』について「によれば、杜詩において「国」が単独で用いられる場合、長安の意で用いられることはない。（『東西南北の人―杜甫の詩と詩語』研文出版）

向嶋成美編『李白と杜甫の事典』（大修館書店、二〇一九。「春望」の担当は三上英司）

〔口語訳〕国は破壊され山河だけが昔のままあり、（長安の）街は春になって草木ばかりが生い茂る。

〔語釈〕国破Ⅱ国の組織が破壊される。「国」は、一説に国都。城春Ⅱ「城」は長安の街。

清・李文焯『杜律通解 五言集解』卷一

国以社稷為重、今惟山河在。可見社稷幾亡（国は社稷を以て重しと為す、今は惟だ山河のみ在り。社稷 幾んど亡ぶることを見る可し）。

孫潜『杜詩全訳』（東方出版中心、二〇二二）

国家残破了、山河仍在眼前、春天還是来到了這城裏、草木鬱鬱青青。

『漢語大詞典』

①国家。『詩経』小雅・節南山「国既卒斬、何用不監（国既に卒く斬ゆ、何を不用て監さ

る) 国も既に尽く滅びんとする有様である。(大師の尹氏は) 何故にかかる国情にかんが監視見て、己れを反省して、民を憫まないのか。②国都。『春秋左氏伝』隱公元年「祭仲曰、都城過百雉、国之害也。先王之制、大都不過参国之一、中五之一、小九之一(祭仲曰く、都城 百雉に過ぐるは、国の害なり。先王の制に、大都是参国を参にしての一、中は五の一、小は九の一に過ぎず) 重臣の祭仲が申した、地方の都邑で百雉(高さ二・二五メートル、長さ三・七五メートル)を超えるもののあるのは、国の害でございませう。昔の賢王のおきてによれば、大きい都邑でも国都の三分の一、中は五分の一、小は九分の一を超えないのでございませう。

※各種教科書

◎中学校

『国語2』 (光村図書、二〇一六)

戦乱によって国都は破壊されたが、山と河はそのままにある。城壁で囲まれた町の中にも春が訪れ、草や木が生い茂っている。

国 国都。長安のこと。城 城壁で囲まれた都市。これも長安を指す。簪 冠を髪に留めるためのピンのこと。

『現代の国語2』 (三省堂、二〇二二)

国破れて 国都が破壊されて。城 城壁で囲まれた都市。「国」「城」はともに当時の都、長安(現在の陝西省西安市)を指す。渾て簪に勝へざらんと欲す 全く簪をさすこともできないほどだ。「簪」 二二二二では冠を留めるピンのこと。

『伝え合う言葉 中学国語3』 (教育出版社、二〇二二)

国破れて 国都長安(現在の陝西省西安)が、安史の乱(七五五)のために破壊されたことをさす。城 ここでは長安の街をさす。中国の都市は城壁に囲まれていた。簪に勝へざらんと欲す 髪の毛が少なくなつて、簪もさせないほどになっている。「簪」は冠を留めたためのピンのようなもの。

『新しい国語2』 (東京書籍、二〇二二)

国破れて 長安の都は反乱軍に攻め破られてしまつて。城 城壁を巡らした、昔の中国の都市。また、町の中。渾て簪に勝へざらんと欲す 簪(冠を固定するピン)さえ全く挿せなくなるうとしている。 出典「漢詩大系」と明記。

◎高校

『精選言語文化』 (東京書籍、二〇二二) 『新編言語文化』 (東京書籍、二〇二二)

国破 国都長安が破壊された。城 まち。城壁で囲まれた都市。簪 かんざし。冠を髪にとめるもの固定させるためのもの。ヘアピンの類をいう。イラストあり。

『高等学校 言語文化』 (第一学習社、二〇二二)

国 国都長安(今の陝西省西安市)をさす。城 語釈なし。簪 かんざし。士大夫であることを示す冠を髪にとめるもの。

『高等学校 標準言語文化』 (第一学習社、二〇二二)

国 国都長安(今の陝西省西安市)をさす。城 城壁で囲まれた町。ここでは、長安のこと。簪 かんざし。士大夫であることを示す冠を髪にとめるもの。

『高等学校 新編言語文化』 (第一学習社、二〇二二)

国 国都をさす。ここでは長安のこと。城 城壁で囲まれた町。ここでは、長安のこと。簪 冠をとめるために髪にさすもの。当時、成人の男子は必ず冠をつける習慣があつた。

『高等学校 精選言語文化』（第一学習社、二〇二二）

国Ⅱここは国都長安（今の陝西省西安市）をさす。城Ⅱ語釈なし。簪Ⅱかんざし。士大夫であることを示す冠を髪にとめるもの。

『新編言語文化』（数研出版、二〇二二）

城Ⅱ唐の都、長安の町。渾欲不勝簪Ⅱ「簪」は、髪に挿して冠を固定するための針。かんざし。

『精選言語文化』（明治書院、二〇二二）

国破Ⅱ都は破壊された。「国」は、ここでは、首都の意。安祿山の乱により、反乱軍に占領された都（長安）の混乱をいう。城Ⅱ城壁で囲まれた長安のまち。簪Ⅱ冠を留めるかんざし。

『精選言語文化』（三省堂、二〇二二）

国破Ⅱ安史の乱（七五五〜七六三）によって、国（国都の長安）が破壊されて。城Ⅱ町。城壁で囲まれた市街。ここは唐の都の長安を指す。簪Ⅱ冠を髪にとめるためのピン。

二二 「山河」と「草木」の含意

〔山河〕

遠藤星希「杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について」（「杜甫研究年報」第六号、勉誠出版、二〇二三）

「春望」の首句で「山河」と対置される「国」については、従来「国家」を指すという説と「国都」を指すという説とが併存していた。この問題については後藤秋正氏による専論「春望」の「国」について」ですでに検証がなされている。

後藤氏はまた論文「杜甫の詩における「山河」と「山川」、「江山」（『春望』の系譜―続々・杜甫詩話』研文出版、二〇一七）の中で、杜詩における「山河」と「山川」、「江山」それぞれの語の差異についても考察されている同論文の「おわりに」で、後藤氏は次のように述べる。

「山河」は時に蜀地の山やかかわを指すこともあるが、『吉川注』に、「人事国家の興亡変化に超然として存在する自然をいう」とあったように、人の感情の在り方如何とは関わりなく、地上に存在する山とかわである。

加藤敏「山水・山川・山河」（後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ』（東方書店、二〇〇〇）

この「春望」の「山河」も、悠久なる自然や堅固な要害の表象としてのみでなく、むしろ国土の表象として理解することが可能なものではあるまいか。

吉川幸次郎『杜甫詩注』（前出）

「山河在り」存在として「在」るのは「山河」のみである。……「山河」の語、もとより人事国家の興亡変化に超然として存在する自然をいうが、ことに軍事的要害としてのそれであること、しばしば。

※『史記』卷六十五、呉起伝

〔魏〕武侯、浮西河而下。中流顧而謂呉起曰、「美哉乎山河之固、此魏国之宝也」（魏の武侯、西河に浮かびて下る。中流にして顧みて呉起に謂いて曰く、「美なる哉乎山河の固め、此れ魏の国の宝なり」。）

※晋・張載「劍閣銘」

昔在武侯、中流而喜。山河之固、見屈吳起（昔在武侯、中流にして喜ぶ。山河の固め、吳起に屈せらるる）。

〔草木深〕

遠藤星希「杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について」（前出）

共同体の成員間で共有されていた「山河の固め」という神話が崩壊した今、城壁を隔てた向こう側に存在する山河は、もはや「むかしのまま」ではなくなってしまったのである。

李白「経乱離後、天恩流夜郎、憶旧遊書懷、……」

草木殺氣揺 草木 殺氣揺き

星辰無光彩 星辰 光彩無し

白骨成丘山 白骨 丘山を成す

蒼生竟何罪 蒼生 竟に何の罪かあらん

杜甫「述懷」

今夏草木長 今夏 草木長じ

脱身得西走 身を脱して西走するを得たり

杜甫「洗兵行」

三年笛裏關山月 三年 笛の裏 關山の月

万国兵前草木風 万国 兵の前 草木の風

杜甫「垂老別」

万国尽征戍 万国 尽く征戍

烽火被岡巒 烽火 岡巒を被う

積屍草木腥 積屍 草木腥く

流血川原丹 流血 川原丹し

元好問「壬辰十二月、車駕東狩後即事五首」〈其二〉

慘澹龍蛇日鬪爭 慘澹として龍蛇 日と鬪争し

干戈直欲尽生靈 干戈 直ちに生靈を尽くさんと欲す

高原水出山河改 高原 水出でて山河改まり

戰地風來草木腥 戰地 風来つて草木腥し←杜甫「春望」と「垂老別」を意識する。

※『魏志』卷十八、李典伝

李典字曼成、……。劉表使劉備北侵、至葉。太祖遣典從夏侯惇拒之。備一旦燒屯去。惇率諸軍追擊之、典曰、「賊無故退、疑必有伏。南道狹窄、草木深、不可追也。」惇不聽与于禁追之、典留守。惇等果入賊伏裏、戰不利、典往救（李典 字は曼成、……。劉表 劉備をして北侵せしめ、葉に至る。太祖 典を遣り夏侯惇に従いて之を拒がしむ。備 一旦 屯を焼きて去る。惇 率諸軍を率いて之を追撃せんとす、典曰く、「賊 故無くして退くは、疑うらくは必ず伏有り。南道は狹窄にして、草木深く、追う可からざるなり。」惇 聴かず、于禁と之を追ひ、典は留守す。惇等 果たして賊の伏裏に入り、戦に利あらず、典 往きて救う。）」

一一三 「感」・「濺」と「恨」・「驚」の主語

高橋梨一（簑笠庵）『奥細道菅菰抄』（一七七七八刊）

杜甫ガ春望ノ詩二、時ヲ感ジテハ花モ涙ヲ濺ギ、別ヲ恨テハ鳥モ心ヲ驚カス、……是等を趣向の句なるべし

中里介山『漢詩提唱（杜甫）』（隣人之友社、一九三七）

時に感じては花涙を濺ぎ 別を恨んでは鳥心を驚かす

小杉放庵『唐詩及唐詩人』（書物展望社、一九三九）

時に感じては花に涙をそゞぎ 別れを恨みては鳥も心を驚かす

松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（前出）

A作者が、花を見ても涙を流し、鳥の声を聞いても心を痛める。

B花も涙を流すかのようにはらはらと散り、鳥も心を痛めているかのように啼く。

吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（前出）

うたての時節や 花 ほろほると涙し／人やいずこ 鳥も 心おののく

川合康三『杜甫』（岩波新書、二〇二二）

「感時」「恨別」の主体は詩の発語者ともとれるし、花や鳥ともとれる。……語と語の関わり方を明示する指標がないのだから、もともと動作の主体が何か一つに限定されていないのだ。

二一四「連三月」について

鈴木虎雄『杜少陵詩集上』（前出）

旧説に三月とは春の第三月をいひ、三箇月をいふに非ずといへり。然れども連三月とし三月を三箇月と解し得ざるに非ず、蓋し作者は至徳元載の極末期に長安に入りこみしなるべく、その家族と別れて以後の計算とみれば暮春の月まで三箇月にて可なり。

目加田誠『杜甫』（前出）

〔訳〕「のろし火はこの三か月もつづいてやまず、……。」

〔語釈〕一説に陽春三月。戦争が去年以来、この三月までつづいてなおやまぬとし、また一説には烽火がこの三か月間ひきつづいておることとする。

黒川洋一『杜甫』（岩波中国詩人選集、一九五七）

〔三月〕陽春三月。一年のうちも最も美しい季節である。一説には三か月間とする。

吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（前出）

〔連三月〕両説ある。「三月」を三か月間とするのは、宋の趙次公であって、この詩を前年正月の作とする彼は、前前年十一月に安祿山が反して以来、ちょうど三か月間、戦争の象徴であるのろしが、「連」続けているとする。一方、「三月」は陰暦の三月、すなわち季春の月とするのは、宋の黄鶴であり、「烽火」はずっとその月までも「連」続したままの意とする。いま後説にしたがう。……ここの「三月に連なる」も、きさらぎの連続としてあるやよいの月、それは一年中のもっともこのましい月、そこへ「連」続するものが、たのしい春景色ではなく、いとわしい「烽火」なのをいうとしたい。

松浦友久『詩語の諸相―唐詩ノート―』（研文出版、一九八一）

「烽火連三月」の「三月」を、「季春三月」なり「春三箇月」なりのように実際の 数に限定する必要はないことになる。……「烽火はすでに三月ものあいだつづき」あるいは、「烽火はすでに何か月ものあいだつづき」とするのが、原詩の意味に最も近いと考えられる。

※杜詩の「連三月」はこの詩にのみ。

徐放『杜甫詩今訳』（人民日報出版社、一九八五）

〔連三月〕三月、是指季春三月。連三月、一説是指正月・二月・三月。都可通。

孫潜『杜詩全訳』（前出）

〔連三月〕按常例応解釈為連続三個月、但從安史乱起到至徳二歳三月、已一年多、故不能這樣解釈。訳詩据黄鶴注、「此当是至徳二載三月、陷賊營時所作。三月者、指季春三月。」

李翼雲・李寿松『全杜詩新釈』（中国書店、二〇〇二）

〔連三月〕接連好幾個月。

※各種教科書

『新しい国語2』（東京書籍、前出）

烽火三月に連なり敵の来襲を知らせるのろしは三か月間上がり続け。

『現代の国語2』（三省堂、前出）

烽火三月に連なり戦乱が三か月間続いて。

『国語2』（光村図書、前出）

戦いののろしは三か月間も続き、……。

『伝え合う言葉 中学国語3』（教育出版、二〇二二）

三か月。または、長い期間。

『新編言語文化』（数研出版、前出）

連三月も三ヶ月にもなっても続き。

『精選言語文化』（東京書籍、前出）

連三月も数か月やまずに続いている。

『精選言語文化』（明治書院、前出）

連三月も何か月も続き。「三」は、ここは不特定の数を表す。

大橋賢一「杜甫「春望」における「三月」について」（北海道教育大学札幌校・旭川校漢文学研究室「杜詩教材研究論叢」五、二〇一四）

「連」は、地名あるいは場所を目的語とするのが一般的であり、「春望」のように、時間にかかわる語句を目的語とするのは特殊であることがわかる。……しかし、以上のような検討から、「春望」の「三月」は、早春、仲春、晩春の、春三か月間を指し得ることが明らかになったであろう。

二一五 「家書」は届いたか―「家書万金に抵る」―

吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（前出）

のろしの火 弥生にもやまず／妻のふみ 億のあたひよ

家からの手紙（家書）、鄭州三川県において来たままの妻からの手紙を意味するに相違ないが、「佩文韻府」、その「拾遺」において、杜のこの句のみをあげる。杜ものちの巻四の「家書を得たり」で、もう一度だけ使う。

孟浩然「登万歳楼」

今朝偶見同袍友 今朝 偶と同袍の友に見う

却喜家書寄八行 却って喜ぶ家書 八行を寄するを

岑参「磧西頭、送李判官入京」

送子軍中飲 子を送りて軍中に飲み

家書醉裏題 家書 醉裏に題す

太田青丘『唐詩入門』(河出文庫、一九五五)

敵の来襲を報ずるのろし(烽火)は既に三月も続いているのにまだやむ気配なく(戦乱の収まらざるをいう。この句第三句の感時に応ず)、家族から自分のもとに届けられる手紙は戦乱の危険を冒して来るために、きわめて高価について、万金も出さねば手に入れることはことばできない。(抵は相当するの意)(この句第三句の恨別に応ず)

鈴木修次『杜甫』(清水書院、一九八〇)

続くいくさのために、家郷からの便りもまれになり、たまに届く家郷の便りは、万金の価値を持つ、というのが第六句の意。

徐放『杜甫詩今訳』(人民日報出版社、一九八五)

呵／戦争一直還沒有停息／接連着已度過兩箇年的三月／在這樣的日子／得到一封家／真都抵得上兩萬黃金。

鈴木虎雄『杜少陵詩集上』(前出)

乱の急をつげ知らず烽火は前から今の三月の節まで(或は三箇月)つづいている。この際の家からの手紙は貴くて万金にも相当する。

黒川洋一『杜甫上』(岩波中国詩人選集、一九五七)

家族のたよりは万金にも相当するほどに思われる。

川合康三『杜甫』(岩波新書、二〇二二)

……その中であって別離した家族の消息を伝えるたよりは、万金にも値するほど貴重だ。

井上靈山『選註 杜少陵詩集』(崇文館、一九二一)

烽火連三月は干戈未だ息まざるなり家書万金は道路梗塞して、家人の消息を得る容易ならざるなり。

森槐南『杜詩講義 上巻』(前出)

……わが家は鄜州あたり長安より余り遠くない所であるけれ共其地の消息を得るといふことは極めて六づかしいので万金を出しても漸く一封が得難いことであらうかと思はれることで若し又家書を得たならば万金の値にも相当する喜びをいたすことでありますが其家書は一向参らない、さうして唯さへも白頭であるところに日夜我家書を望んで頭を搔いて居る、どうかいたして家書を得たいものであると思ふても家書は得られませぬものであるから……

細貝香塘『杜詩鑑賞』(帝國教育会出版部、一九二九)

我家は鄜州にあつて、長安とは程遠からぬ所であるが、其の消息さへも得ることが出来ぬ。もし消息があつたならば、一封の書でもソレコソ万金を得たる喜びと同じであらうに、頓と家書はこない。

向嶋成美編『李白と杜甫の事典』(前出)

(連絡が途絶えた)家族からの便りは万金にもかえがたい。

杜甫「得舍弟消息、二首」(其一)

近有平陰信 近ごろ平陰の信有り

遥憐舍弟存 遥かに憐れむ舍弟の存するを

側身千里道 身を側む千里の道

寄食一家村 食を寄す一家の村

同右（其二）

汝懦婦無計 汝は懦にして帰るに計無く

吾衰往未期 吾は衰えて往くに未だ期あらず

……

西京三十口 西京 三十口

雖在命如絲 在りと雖も命は絲の如し

※平陰 山東省済南市平陰県。弟の杜穎は齊州臨邑県（山東省徳州市臨邑県）の主簿になつていたが、その後、ここに身を寄せていた。

☆杜甫と安史の乱（主として古川末喜「杜甫年譜」（講談社学術文庫、前出）による）

天宝一四載（七五五）

十一月九日、安禄山挙兵する。一月初、杜甫、長安から奉先に赴く。

一二月一二日、洛陽陥落。

至徳元載（天宝一五載、七月改元。七五六）

春、長安にあり。右衛率府兵曹参軍に就くのはこの春か。

初夏、家族を避難させるために再び奉先県（陝西省渭南市蒲城県）に赴き、五月、さらに白水県（陝西省渭南市）のおじ崔氏に身を寄せる。

六月九日、潼関で哥舒幹が敗れ、十三日、玄宗等が長安を脱出。

玄宗が蜀へ逃れて数日後、長安陥落。

杜甫、白水県を離れ、その東北の坊州（陝西省黄陵県および宜君県一帯）の孫宰の家に身を寄せる。

同月、鄜州三川県（陝西省延安市富県）の羌村に家族を住まわせる。

七月一二日、皇太子李亨が靈武（寧夏回族自治区銀川市の東北）で即位。三川から単身で肅宗の行在所に向かおうとしたが、途中で反乱軍に捕らえられ、長安に連行される（どこで捕らえられたかは不明）。

八月、長安で鄜州の家族を想う「月夜」を作る。長安城内での行動は官位が低かったためか自由。

至徳二載（七五七）

一月、安禄山、安慶緒らに殺される。

二月七日、肅宗の行在所が彭原（甘粛省慶陽市）から鳳翔（陝西省宝鸡市鳳翔区）に移る。これ以後、長安を脱出して鳳翔の唐軍に帰する者が日夜たえず。

三月、「春望」の作あり。

四月、長安城西門の金光門より脱出して鳳翔の行在所へ向かう。

※『資治通鑑』卷二百十八、唐紀三十四 Ⅱ反乱軍の勢力範囲

自上離馬嵬北行、民間相伝太子北收兵来取長安、長安民日夜望之。……其始自京畿・鄜・坊至于岐・隴皆附之、至是西門之外率為敵壘、賊兵力所及者、南不出武関、北不過雲陽、西不過武功（上）馬嵬を離れて北行せしより、民間太子北より兵を収め来りて長安を取らんとすと相い伝え、長安の民は日夜之を望む。……其の始めは京畿・鄜・坊より岐に至るまで皆な之に附し、是の西門の外に至るまで率いて敵壘と為り、賊兵の力の及ぶ所の者は、南は武関

を出でず、北は雲陽を過ぎず、西は武功（陝西省咸陽市武功県）を過ぎず。

杜甫「述懐」←至徳二載の夏、鳳翔での作。

去年潼関破 去年 潼関破れ

妻子隔絶久 妻子 隔絶すること久し

……

柴門雖得去 柴門 去くを得と雖も

未忍即開口 未だ即ち口を開くに忍びず

……

寄書問三川 書を寄せて三川に問う

不知家在否 知らず家在るや否やを

比聞同罹禍 このころ 比聞く同じく禍いに罹りて

殺戮到鶏狗 殺戮 鶏狗に到ると

……

自寄一封書 一封の書を寄せてより

今已十月後 今已に十月の後

反畏消息来 反つて畏る消息の来たるを

寸心亦何有 寸心 亦た何か有らん

……

杜甫「得家書」←至徳二載の秋、鳳翔での作。

去憑游客寄 去るは游客に憑りて寄せ

来為附家書 来たるは家書を附するが為なり

今日知消息 今日 消息を知る

他郷且旧居 他郷なるも且つ旧居なり

熊児幸無恙 熊児は幸いに恙無く

驥子最憐渠 驥子は最も渠を憐れむ

……

※游客⇨旅人。熊児⇨長男の宗文の幼名。驥子⇨次男の宗武の幼名。

おわりに

横山伊勢雄『唐詩の鑑賞―珠玉の百首選―』（前出）

この詩の構成は、「国破れて山河在り」と大きなスケールで人間社会と自然を対比的にうたい起こし、そこから喚起される悲哀の感情を自然の景物にからめてうたい、時に感じ別れを恨むことの具体的事象を置いた上で、わが身についての嘆きで結ぶという形になっている。つまり国家⇨社会⇨家族⇨我と一点に凝縮させて、いずれも変動の相においてとらえたそれぞれの憂いが詩人の一点に集中したものととして、重く深くとらえられているのである。

付け足し

国家⇨社会⇨家族⇨我 我は衰えつつあつて果たして国家（天子）の役に立つかどうか不安がこみ上げる。その国家はどうなったか？我⇨国家 循環する。

附録 「自京赴奉先県詠懷五百字」——「朱門酒肉臭」——

杜陵有布衣 杜陵に布衣有り

老大意転拙 老大にして意転た拙なり

……

煖客貂鼠裘 客を煖むるは貂鼠の裘

悲管逐清瑟 悲管は清瑟を逐う

勸客駝蹄羹 客に勸むるは駝蹄の羹

霜橙压香橘 霜橙は香橘を压す

朱門酒肉臭 朱門には酒肉臭し

路有凍死骨 路には凍死の骨有り

荣枯咫尺異 荣枯 咫尺に異なり

惆悵難再述 惆悵として再び述ぶること難し

※吉川幸次郎『杜甫私記』（筑摩叢書、一九八〇）の書き下し。

杜陵に布衣有り／老いて大けゆくまに意は転よ拙なきに／……客に煖かきは貂鼠の裘にして／悲しげなる管は清らかなる瑟のねを逐い／客に勸むるは駝蹄の蹄の羹にして／霜をへし橙は香ぐわしき橘を压す／朱くぬりたる門にては酒も肉も臭れるに／路には凍死の骨有り／荣枯は咫尺のへだてにて異なり／惆悵悵ぼれて再述ぶるに難し

※杜陵＝長安の南。かつて杜甫が住んでいた。布衣＝無官の者。庶民。意転拙＝ますます気が持たが世間とずれる。貂鼠裘＝テンの皮衣。駝蹄＝ラクダのひづめを煮たスープ。霜橙＝霜を経た橙。香橘＝香り高いミカン。荣枯＝栄えることと衰えること。咫尺＝八寸と一尺。ごく近いこと。惆悵＝哀しみ嘆くさま。

諸橋『大漢和辞典』

臭 にほひ。①か。嗅覚に感じ得る気味の総名。②かをり。かうばしい気。よいにほひ。③くさい気。くさみ。悪いにほひ。

『漢語大詞典』

臭 ①穢汚之氣。与「香」相对。②香。香氣。

森槐南『杜詩講義』（前出）

それで毎日／＼朱門は殆ど肉と酒の臭を以て満たされて居ることであります。

鈴木虎雄『杜少陵詩集 上』（前出）

朱門 酒肉臭し＝「字解」臭とはあまりに多くあるゆえ、のこつて腐敗しくさきにほひをい

黒川洋一『杜甫詩選 下』（前出）

臭 腐臭を発すること、一説にはよい臭を発することという。

目加田誠『杜甫』（前出）

朱門 酒肉臭く＝酒肉がありあまって、くさって悪臭を出していること。

吉川幸次郎『杜甫詩注』第一冊（前出）

「臭」もと「気也」「香也」と訓じ、嗅覚にふれる芳香悪臭、どちらをもいうが、ここの意はむしろ「敗る也」。

向嶋成美編『李白と杜甫の事典』（前出）

○酒や肉が食べきれないほどあり、腐臭をたてていること。

張天健『唐詩答客難』（学苑出版社、一九九〇）

問 ……家伝戸誦の名句「詠懷」中の「朱門酒肉臭，路有凍死骨」我久有一疑、在這天寒地凍中、那朱門的酒肉真可能發臭嗎？

答 ……在這名句中、關鍵是「臭」字、一般是解着「腐臭」、爾所質疑也是從這樣考慮的。姑且承認、肉放久了會腐臭、然而、酒則不會陳腐發臭、正相反、酒會越放越香陳年老酒比余酒是高一籌的。如果把「酒肉」作為「肉」偏義複詞解積、也是沒有這樣解積的。「臭」字另有一鮮見的解積是「香氣」。『易繫辭・上』有、「……」。『禮・內則』云、「……」。「容臭」是香物。「臭」、都是「芬芳」的意思。又如郭璞「苾魚贊」、「蘼蕪其臭」、「臭」作香氣發散。拋此可見、杜甫詩原句的意思是「朱門裏是酒肉飄香、大路边有凍餓者的尸骨」。這不是咫尺柴枯的鮮明對照嗎？

※『易繫辭・上』「二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭（二人 心を同じくすれば、其の利きこと金を断つ。同心の言は、其の臭 蘭の如し）。」正しい心情の持ち主が二人して心をあわせれば、その鋭さは金鉄をも断ち得るほどであり、心を同じくすることばは、蘭の香りのごとくかぐわしいものである（岩波文庫）。

※苾魚しびよ 鮒ふなに似た魚の名。

五) 呂寧『大庇天下寒士俱歡顏——解讀杜甫漂泊一生的濟世夙願』（北京工業大学出版社、二〇一

一） 一边是從富貴人家的朱門中飄散出酒肉的誘人香氣、另一边是荒野路邊的凍死之人、……。